
君は向日葵のように、そして私は儚く強い一輪花。

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は向日葵のように、そして私は儚く強い一輪花。

【Nコード】

N5743E

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

付き合って1年半の若葉と桐。そんな若葉の前に昔好きだった奏平が現れる。若葉の気持ちは揺れに揺れ、誰が好きなのか分からなくなる。彼女がいてもまだ奏平が好きだと桐を振ったけど……。桐の笑顔で強くなる若葉、「今度はあたしが桐を追いかける」。甘さに加えて切なさいっぱい青春ラブ。

好きです！

俺：いや、僕絶対幸せにします！！

そんなプロポーズみたいな告白に、
つつい笑えてしまつてOKして
いる自分がいた。

「おい、若葉」

「あ。遅かったね桐」

付き合つて1年半。

もうそんなに経つのかつて自分でも驚く。

中学のとき他校生の桐が告白してくれて、
桐のことは全くと云つて
良いほど知らなかったけどOKした。

桐ならきつとあたしを幸せにしてくれる…つて思えた。

晴れて高校は同じ。

これでようやくもつと桐を好きになれて、幸せな日々が送れる。
そう思ってた。

「あ、君が桐の彼女？」

あなたと再会するまでは。

「え……」

桐が今日、親友にあたしのことを紹介したいからって言って桐の親友と会うことになった。

あたしの親友にはもう紹介してあったけど桐はまだだったから。

待ち合わせしていた場所に現れたのは

「二ノ宮^{そうへい}：奏平くん」

まさしく、彼だった。

ずっとずっとずーっと片思いしていた…大切な人。

「え？俺の名前…あ、ああ！及川さん！」

彼は思い出したようにあたしの名前を言う。

「あれ、知り合い？」

「おう。中学が同じだったんだ」

「へえ。じゃあ紹介する手間もはぶけたな」

桐と二ノ宮くんはワハハと笑いあう。

髪の色が少し茶色くなって、前見たときよりも背なんかずっと高くなってる…

ワイシャツのボタンを全部開けて下に黒のタンクトップを着ている。

「でもそっかー、及川さんが桐の彼女だったとは」

二ノ宮くんはあたしの方を見て笑って言った。

「可愛いだろ」

「桐にもつたいないくらいにね」

そう言う2人はまたじゃれ合う。

本当に仲良いんだ。

桐とはクラスもけっこう離れてるから、桐がクラスでどんな生活を送っているのかは知らない。

その知らない世界で二ノ宮くんと友達になっていたなんて…

しばらく3人で他愛もない話をしていて、いつの間にか日が暮れてしまっていた。

二ノ宮くんは慌てたように「彼女と待ち合わせてるんだっ！」と腕時計を見ながら言い、「じゃあまたな」と手を振りながら走って行ってしまった。

「あ、あいつの彼女見てないなー」

桐が声を張り上げて言った。

そんな桐の隣で、あたしはポツリと囁く。

「美人だよ。中学のときから公認でとってもお似合い」

綺麗な髪の毛をいつもいろんな髪型にきてきて
ナチュラルメイクで

笑った顔がとっても可愛くて色白な人。

中2のときに二ノ宮くんから告白して付き合いだした。

みんなが2人を祝福した…

「よく知ってんな。ああ、中学が一緒なのか」
「うん」

あたしは中1のときからずっと二ノ宮くんに片思い。

ほんと…きつかけは些細なことだった。

駐輪場で誤って自転車をドミノ倒しにしちゃったら、通りかかった
二ノ宮くんが嫌な顔1つせず直すのを手伝ってくれた。

お礼を言ったら、「困ったらお互い様だよ」って笑顔で言った。

それから、その笑顔を見るのが大好きになった。

クラスが違う彼を廊下とかで見かけるたびに胸が高まった。

けど、話しかけるタイミングも分からずズルズルと引きずっていたら、彼には彼女ができてしまった。

お似合いすぎて、あたしなんかが入っていく隙なんかありはしない。

なのに諦めきれないでいる自分に、桐が告白してくれたのは1ヶ月後のことだった。

逃げてるって思われても
桐を利用してるって思われても

あたしも幸せになりたかった。

幸せに

なりたかった…

放課後になると、忙しそうに部活に行く人、さっさと家に帰る人が遊びに行く人がほとんどで教室に残ってる人はほとんどいない。

あたしはいつも桐と一緒に帰るんだけど、桐のクラスのほうが圧倒的にSHRが短いから桐があたしを迎えに来る。

担任の長い話が終わったと同時に桐が「若葉っ！」って叫びながら入ってくるもんだから、みんなの公認カップルになってしまった。

ガヤガヤとする教室もそのうち静まり返っていく。

椅子に座って外を眺めているけど、桐は一向に来そうにない。

「…たまには行ってみよっかな」

桐の教室、か。

放課後だしきつともうほとんど人はいないはず。

桐はただ寝てるだけ。

二ノ宮くんなんか…いないはず。

いないでほしい。

机の横にかけてあるカバンを手に取り、教室を出る。

割と離れている桐の教室にトコトコ歩く。

ふと窓から下を見るとカップルが手をつなぎながらイチャイチャしている。

じっと見てみると、カップルは一目も気にせずキスをした。

あたしだって桐とキスくらいする。

手だっつなぐ。

桐の家にお泊りもした。

けど…

「あたし誰が好きなのかな…」

桐と1年半も付き合ってきた。

二ノ宮くんを見ないように、見ないようにって思いながら。

桐という日々は楽しすぎる。

落ち込んでても明るくなれるし、あたしを大事にしてくれてるのが
すごくよく分かる。

けど、二ノ宮くんと初めて話して…

心が揺らいでる。

二ノ宮くんには彼女がいるし、あたしは二ノ宮くんの親友の彼女。

揺らいだって仕方ない。

二ノ宮くんを思ったってしょうがないのに…

桐の教室のドアをソツと開ける。

誰かが窓際の席で寝ている。

「もー、やっぱ桐寝てるう」

微笑しながら近づき、背中に手を置いて「きーり、起きろぉ」と少し揺らす。

微かな声を上げて顔を動かす桐の顔を見ると

桐じゃなかった。

「えっ…二ノ宮くん?!」

驚いてつい声を上げてしまった。

「ん…」

起きたかと思われたけど、二ノ宮くんは目をゴシッと軽くこすって再び寝始めた。

なんで…だって髪の毛黒い。

この前まで茶色くなかったっけ…

でも彼氏と他の男の子を見間違えるなんて。

「…」

…こんなに近くにいる。

中学時代あれほど切ない片思いしていた人が、今日の前にいる。

触れられる距離にいる。

あたしはそつと髪の毛に触れた。

軽く手に黒色がついてびっくりしたけど、スプレーで黒く染めているんだとすぐに理解した。

夕焼けをバックに寝ている彼。

今、どんな夢を見ているんだろう。

「なんで…狩野さんなの？」

狩野佐織、彼の彼女。

やっぱりカッコ良い人には可愛い人が良いんだろうか。

あたしがもし告白してたらどうしてた？

でも、やっぱり断られるに決まってるよね。

だって二ノ宮くんから狩野さんに告白したんだ。

そのとき、ガタツと音がした。

パツと振り向くとドアの向こうに桐がいて、あたしに気づかれたせいかヤバイというような顔を一瞬見せた。

「…若葉」

ドアを開け、桐は一瞬見せた動揺の顔を隠していつものようにニコヤカになる。

「わり、待たした！俺もさっきまで奏平と一緒に寝ててよ」

「あ…そうなの。ううん、全然大丈夫」

見られて…たよね。

どこから？

ねえ、なんで何も言わないの？

「授業もHRも爆睡でさー、起きたらもうみんないなかったってゆーね」

なにも思わないの？

気になるんならなんで聞かないの？

「あ、はは…なにそれえ。どんだけ眠いのよ」

でも、あたしからは言えない。

口が裂けても言えない…

「おい奏平。起きろー」

桐は乱暴に二ノ宮くんを揺する。

その衝動で二ノ宮くんは目を覚ました。

「んー……よく寝たあ」

「もう放課後だぜ」

「げっ、まじかよー!」

二ノ宮くんは時計をチラッと見て「やべえ!」と言って勢いよく立ち上がった。

「彼女?」

桐がそう聞くと二ノ宮くんはカバンに荷物をつめながら「うん、そー!」と焦り言う。

彼女、という言葉に胸がズキツとする。

「あつ及川さん！あー、桐待ちね！」

「うん。頑張つて走つてね、二ノ宮くん」

「おー！」

自分でそう言っておきながら傷ついてるんじゃない世話ない。

いや、傷つく？

なんであたしが傷つかなきゃいけないの？

あたしが彼に恋したのはもう一年半前の話。

桐と付き合いだしたときからそんな思いは捨ててしまっていたはずだった。

二ノ宮くんは「じゃーな！」と元氣良く叫びながら走って教室から出て行った。

シンとする教室。

「じゃ俺らも行こっか」

桐が右手を差し出した。

あたしは左手で桐の手をつなぎ、一緒に歩き出す。

手から伝わる桐の体温。

温かい。

すごく分かる。

桐があたしのことをどれだけ好きでいてくれるか。

だからあたしも桐の気持ちにこたえなくちゃいけない。

だってあたしは桐の彼女だから…

「…ば？若葉？聞してる？」

「え？あ、ごめん。なに？」

ボーッしていると桐があたしの名前を連呼した。

「…若葉さ、なんかあった？」

「え、なに、なにが？誰と？」
「いや…なんでもない」

桐が微妙な顔をする。

なにが聞きたいんだろう。

なんなの？と聞き返すと、桐はまたいつもの笑顔をして「気にすんな」と言う。

桐は、いつもあたしに笑顔をくれる。

桐の笑顔にどれほど癒されたことが…

数え切れないくらい。

「そつえば…桐はなんであたしなの？」

一年半も付き合っていたのに一度も聞いたことがなかった。

当時は二ノ宮くんのことを忘れるので精一杯で、それからずっと桐が隣にいるのが当たり前ようになっていた。

「えっ」

あたしの質問に桐は顔を赤くした。

「なあに？」

しつこく聞くと、桐は口を手で押さえて恥ずかしそうに言った。

「…赤点」

「え？」

「2年のとき赤点取って友達にバカにされてた。そんなとき若葉が

…」

『ねえねえ若葉、あの人赤点だつてえ』

『へえ。赤点かあ』

そういえば、街で男の子たちが騒いでたっけ。

みんなしてよつてたかって1人の男の子をひやかしてた。
もちろん冗談半分だけど。

あたしと友達は偶然そこを歩いていて、友達も笑ってた。

その男の子たちは放課後よく見かけてた。

桐のこともうつろだったけど、思い返せば「ああ、いたかなー？」くらいには思う。

いつも楽しそうに笑う男の子たち。

その中心でいつも向日葵のような笑顔をしていたのが桐だったの。

『でもあの人っていつも明るいいよね。勉強だけが全てじゃないし、たまには赤点つても良いかもねえ』

ほんとにそう思った。

あたしは赤点には無縁だし、赤点を取る人は珍しいと思うけど、でもバカにしようとは決して思わなかった。

勉強より大事なものってあると思うから。

「嬉しかったんだ、俺。赤点なんて取ったの初めてだったし割りと落ち込んでたからさ」

「よく覚えてるね、そんなこと」

「もちろん。だって俺、あのときの若葉の言葉に救われたんだもん」

そう言つて桐はまた最高の笑顔をする。

救われてるのは、いつだってあたしのほう。

「でも、そっか」

事実上失恋したも同然だったあのときのあたし

楽しそうにいつものように放課後騒いでる男の子たちを見て、あんな風になれたら幸せなんだろうにっと思つてた。

いつも見ていた男の子

救えているあたしがいた。

「若葉はなんで俺を選んくれたの？」

「えっ…と……明るくて楽しそうだったから」

嘘じゃない。

嘘なんかじゃない。

桐の良いところは明るくて一緒にいて楽しいの。

弱いあたしでも桐といると強くなれる気がした。

あたしの全てを受け入れてくれるから、あたしも自分自身のことが好きになれるような気がしたの。

「…あ」

公園を通り過ぎるとき、公園のベンチに二ノ宮くんと狩野さんが座っているのが見えた。

足を止めて、2人をじっと見つめる。

つないでいたあたしたちの手がはずれる。

「若葉？」

楽しそうに笑う2人。

そこに小さな男の子がトコトコ2人のところに歩いて行って、2人はまるで我が子のようにその男の子をあやしている。

将来2人が結婚したら…子どもを作ってあんな風にじゃれあうのか

な。

二ノ宮くんの隣にいるのはあたしじゃなくて狩野さんで。

二ノ宮くんの未来予想図の中に「及川若葉」はいない。

「ああ、奏平たちじゃん。なに、奴らがどうかしたの？ 若葉」

彼は狩野さんのもので、あたしは桐と付き合ってるの。

そのことだけを大事にしていれば良いのに、どうして余計なことまで考えてしまうんだろう。

思っけていても仕方ない。

叶わない恋を追いかけても意味ないのに。

なのに

止まらないの。

気持ちが溢れてくる。

終わっただはすの恋なのに

こんなにも　こんなにも

全身で好きだって言ってる…

「ちょ…若葉?!」

涙が溢れてくる。

袖で拭いても拭いても拭いきれないほどの雫。

頭でどんなにダメだって思ったって

好きだって思ったらもうダメなの。

「じゅめ…桐…」

言葉がでてこない。

ごめん、しか浮かばない。

桐への言葉が見当たらない。

あたしは間違った恋をしている。

好きになっちゃいけない人を好きになって、好きになるはずの人を好きを思い込んで付き合っていた。

終わったと思っていたけど
諦められたと思っていたけど

桐を好きだって思っていたけど

全然そんなことなかった。

一目見ただけで顔を赤くして

彼女といるところを見ただけでこんなにも胸が痛む。

その姿を見ただけで愛しさが沸いてくる。

「桐…ごめん、あたし…好きな人がいる…」

あたしはその場に座り込んだ。

手で顔を覆いながら溢れてくる涙に思いを乗せる。

「桐とは付き合えない…ごめん………」

顔から手が離せない。

桐の顔が見れない。

立ち上がれない。

こんな自分惨め過ぎて、ありえない。

桐にこんなにひどいことしてる…

「…若葉」

桐はあたしの手をグイッと引いて、力の入っていないあたしを立ち上がらせた。

ボロボロ溢れる涙で顔がグシャグシャのあたしの顔を一目見て、桐はそのままあたしの手を掴んで歩き出した。

桐は、ただの一言も喋らずあたしを家まで送ってくれた。

あたしの家の玄関の前で去り際に「…じゃあ」と顔を見せずに背中越しに言った言葉を除いては。

あたしはずっと涙が止まらなくて、桐の姿が見えなくなってもしばらくの間ずっと通りの向こうをじっと見ていた。

走って帰って行く桐の姿はとっくに見えなくなっていたというのに。

「あーっ、及川さん！」

友達とベンチに座ってご飯を食べていると、遠くからあたしの名前を呼ぶ声がした。

振り向くと、二ノ宮くんが手を振りながらこっちに向かって歩いてくる。

「二ノ宮くん……」

キョロキョロと二ノ宮くんの周りを見ると、二ノ宮くんは「あ、桐

「桐は今購買なんだ」と笑顔で言った。

「そんなつもりじゃなかったんだけど…」

「ううん、そんなつもりだった。」

「桐がいないか心配した。」

「あ、友達？」

「若葉の友達の佐藤久美でーすっ」

「よろしく。俺若葉の彼氏の親友の二ノ宮奏平」

「彼氏…」

「二ノ宮くんの口からそんな言葉が出ただけで心が痛む。」

「恋愛って、こんなだった？」

「そっぴい最近桐が元気ないんだよねー。及川さん知ってる？」

「あ、若葉も元気ないのよね」

「じゃ2人でケンカ中？」

「二ノ宮くんと久美がそんな会話をする。」

ケンカなんてものじゃない。

あたしが一方的に桐を切った。

桐は悪くない。

あたしが勝手に二ノ宮くんを好きになって桐を傷つけたんだ。

「……………じゃない」

ボソツと呟くと、2人して耳を傾けながら「え？」と聞き返してきた。

あたしは箸を握ってる手にギュツと力を入れる。

「……………彼氏じゃない。あたしが桐を振った……」

桐を嫌いになる理由なんてなにもない。

好きになる要素ばかり持ってる。

いつだってあたしのこと一番に考えてくれてる。

なのに、あたしは二ノ宮くんを選んだ。

叶わないのに

自分で苦しい道を選んで

桐を傷つけて

告白なんかしたらきつと二ノ宮くんだって辛い。

誰も幸せになんかなれない。

あたしが二ノ宮くんを思ってたって、なんの利益もない。

「…あたしが好きなのはっ…」

「若葉!」

勢いあまって言うてはならないことを口走ろうとしたとき、誰かがあたしの名前を叫んだ。

みんな一斉にその声のほうを向く。

「桐!」

二ノ宮くんが叫んだ。

「なあ、お前別れたってどういう…」

二ノ宮くんが桐に詰め寄る。

桐は二ノ宮くんを振り切ってあたしの肩に手を置いた。

「若葉、ちょっと来い」

「…あたしは…」

「良いから！」

桐が手を引っ張るものだから、ひざに乗せていたお弁当がひっくり返って地面に落ちた。

拾おうにも桐があたしの手を引いてグイグイ歩くものだからどうしようもない。

残された2人を見ると、ポカンと口を開けて啞然としている。

グイグイ引っ張る桐の手
いつになく力強い。

別れを切り出してからもう一週間以上経つ。

いつも一緒に帰っていた帰り道

あたしの隣には誰もいなくて、シンとしているの。

隣には必ず向日葵のような笑顔の桐がいた…

「桐っ、どこまで行くの?!」

あたしがそう言つと、桐はピタッと足を止めた。

「…若葉、俺別れて良いなんて言つてねえぞ」

「え…」

「うん、なんて言つてない」

いつもニコやかな桐の顔がいつになく真剣そのもの。

一途な瞳

「でもあたし……本当ごめん。桐のこと好きだけど、でも…」

分からない。

この一週間、桐がいなくてもものすごく寂しかった。

もう桐が隣にいてくれることはないんだって思うと、胸が裂けそうだった。

桐はあたしにとってそれほど大事な存在だった。

「でも、奏平が好き？」

桐の言葉に、パツと顔を上げる。

「なんで……」

「嫌でも分かる。なんではこっちの台詞だよ……」

そりゃそうだよね。

二ノ宮くんたちを見て泣いて、それでいて「好きな人がいる」なんて言えばどんなにバカな人でも分かる。

あたし、ひどいことした。

「二ノ宮くんは……あたし、中学の頃ずっと二ノ宮くんが好きだった」

あ、やばい
泣きそう…

泣いちゃダメ。

あたしが泣いたら桐が悪者になる。

「けど彼には彼女ができて…」

「…それで俺が告白してきたから受け入れた、と」

桐の言葉に言い返す言葉が見つからない。

その通りすぎて、弁論すらない。

「桐なら…大丈夫だと思った」

うつむくと、ポタ…と涙が地に落ちる。

「好きになれるって…幸せになれるって、そう思った」

だって、幸せだった。

桐という毎日はお腹が痛くなるほど笑えて楽しくて

どんなバカなことも桐となら出来るって…

「分からない…。桐のことちゃんと好きはずだった。けど…公園で幸せそうな2人を見たら悲しくて涙が出た…」

誰を好きなのかが分からない。

どうしたら良いのが、もう分からない…

「…俺は、お前がOKしてくれて本当嬉しかった」

桐はグッと堪えるような顔をして、声を押し殺しながら言った。

「絶対幸せにするって思った」

今にも泣いてしまいそうな桐の顔を見ると、余計に涙が出る。

「でも、お前を幸せに出来るのが俺じゃないんだったら意味ないよな…」

桐は弱弱しく笑った。

違う、そんなことない。
不幸せなんかじゃなかった。

「別れようか、若葉」

桐の最後の言葉。

「き、桐っ……待つ……」

待って？

どうして、そんなこと言えるの。

桐を自分から突き放したくせに、本当に失うかと思うと逃がしたくないって？

ありえない…

ありえなさすぎるよ。

桐は、あたしの言葉なんかには聞き耳持たずに「じゃあな」というものような向日葵の笑顔をした。

「……桐!!」

どんなに叫んでも、桐はもう振り向かない。

あたしの心は誰に向かっているのか、なにを求めているのか。

「あたし、幸せだった!!桐という毎日は楽しくて幸せだった!!」

桐があたしの隣からいなくなる。

その現実が受け止められないでいる。

「嬉しかったの!桐の告白っ…ポロポーズみたいで、絶対桐ならあたしを幸せにしてくれるって思った……!!」

叫んでも叫んでも届かない。

聞こえているのか否か。

なんで…

なんであたしはいつもこうなんだろう。

先に桐を好きになっていたら良かった。

そうしたらずっとずっと幸せな日々を送れてた。

離れたくない。

いつでもあたしの傍にいて、あたしを幸せにしてもらいたい。

なのに…

「う…わああああんっ……」

はじめて声を出して泣いた。

これ以上の悲しいことってなにがあるだろうか。

あたし、バカだ…

いつもあとになって気づくの。

大切なものの存在、あとになって気づいて後悔してる。

二ノ宮くんに彼女が出来たときよりも

この前幸せそうな2人を見て泣いたときよりも

もっとずっと、悲しい。

遅いの。

今更桐のことを思ったって、どうしようもないのに。

あたしから別れを言ったのに。

でも、桐から別れを告げられたときは本当に終わりのように感じた。

もう未来永劫桐との幸せな日々は送れないんだと実感した。

「うつ…うつ…」

人気のない裏庭。

昼休みが終わるチャイムが鳴っている。

誰もいない空間。

あたしの鳴き声だけが響いている。

いくら泣いたって戻ってこない。
後悔したって意味がない。

なのに、涙が止まらない。

知らなかった、いつの間にかこんなにも桐を好きになっていたなんて。
で。

二ノ宮くんを見て泣いたくせに、桐と別れを惜しんで泣いてる自分に腹が立つ。

結局どっちが好きなのか。

今なら答えられる…

優柔不断でごめん。
バカなあたしでごめん。

終わった恋に火をつけようとした惨めな自分

結果的に自分を追い詰めることになった。

嬉しかった

嬉しかった

嬉しかったのにつ…

——好きです！俺…いや、僕絶対幸せにします！——

どうしてっ…

「若葉あ、もーすぐクラス替えだね」

放課後の教室で久美とポッキーを食べながらボーツする。

季節は流れて夏が過ぎ、秋も終えて冬になる。

そしてまた春が来る。

「また同じだと良いね」

「ねー」

2年になつたらどんなクラスになるんだろう。

あれから、桐とは一度も顔を合わせていない。

同じ学校なのに不思議。

クラスが10もあるとなかなか会えないものなんだろうか。

体育祭も文化祭も、チラツと遠くから桐を見かけることはあっても話したりはしなかった。

二ノ宮くんにも必然と近寄らないようにした。

心が揺れるとかそんなんじゃない、けじめ。

「牛乳飲みたいなー」

久美はポツキーをかじりながら言う。

「あ、じゃああたし行ってくるよ。ちょうど飲み物欲しかったし」

「あたしも一緒に行くよ」

「良い良い、すぐそこだし」

あたしは席を立ち上がり、カバンから財布を取り出して教室を出た。

何飲もうかなーなんて考えながら購買へ行くと、人ごみの中に桐がいた。

ここであたしが行ったら…

いや、別に会っちゃいけない決まりなんてない。

だけど、別れを決めたのに引きずってるなんて知られたくないの。

きつと幻滅する…

購買から少し離れた場所でうつむいて床を見つめながら、人が少なくなるのを待つことにした。

そのうち桐も買い終わっていなくなる。

こんなコソコソする意味ないのに…

でもきつと顔を合わせたら桐は気まづくてもあの向日葵の笑顔をするの。

どんなときでも笑顔になるの。

きつとあたし、自分を抑えきれない…

夏が過ぎて秋が過ぎて冬がきて

もうじき春になろうとも、桐への気持ちは変わらない。

気持ちを押し殺していることが自分への罰。

懐かしさに引けを取られて二ノ宮くんを好きだと錯覚して、本当は好きなのは桐を振ってしまった自分への罰なの。

こうでもしなきゃ、生きてられない。

片思いの辛さはあたしが一番よく知ってる…

「若葉？」

うつむいているあたしの前に誰かが立つはだった。

見上げると、購買で買ったものを持った桐が驚いた顔をして立っている。

「き…」

桐…

うそ、顔を合わせないようにしてたのに。

「若葉も買出し？あー、今めっちゃ込んでんもんな。若葉人ごみ嫌いだし。よっし、じゃー俺が買ってきてやるよ。なにが良いい？」

桐は長い文をペラペラと笑顔で言う。

今まで…前までと同じ桐。

歯を見せてニカッと笑う、今の季節とは無縁の向日葵…

「…ああ、もう…」

桐には敵わない。

ひどいことしたのに、それでも笑ってくれる。

嬉しいのか懐かしいのか分からないけど、目に涙がたまる。

「えっ…若葉?!」

桐はあたしを見てオロオロするばかり。

どうしてこの人はこうなんだろう。

ううん、この人はこうだからこそあたしが好きになったの。

「桐」

あたしは袖でグッと目を押さえ、桐の顔を見上げる。

「あたし、桐が好き」

あたしがそう言うと、桐は驚いた顔をしながら「ええ?!」と叫んだ。

「…もう少し気持ちが落ち着いたら、今度はあたしが桐を追いかける」

ちゃんと区切りをつける。

桐に恥じないような自分でありたい。

「そのときに桐に好きな人がいたって、あたし諦めない。絶対に追いかけるよ」

笑顔でそう言える自分がいた。

あたしが今こうして笑ってられるのは、桐のおかげ。

桐があたしに強さをくれたの。

あたし1人じゃどうすることもできなかったけど、桐といたことで一回りも二回りも大きくなれた気がした。

あたしの言葉に桐は驚きながら顔を赤くしていた。

あたしは「じゃあね」と手を振って、購買へと向かう。

もう逃げない。

誰が好きなのか、もう迷わない。

たとえ無謀な恋でも、絶対諦めない。

向日葵の咲く季節に

君の笑顔を手に入れるために。

強さをくれて、ありがとう。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5743e/>

君は向日葵のように、そして私は儚く強い一輪花。

2010年10月11日08時06分発行